

## 「女房学校」とそれをめぐる論争

徳 村 佑 市

モリエールの「女房学校」は1662年12月26日、パレ・ロワイヤル劇場で初演された。この劇は戯曲そのものが大作であるうえに俳優が好演したので、モリエールのパリ進出後の画期的な大成功をおさめ、「女房学校批判」の侯爵の言葉をかりれば、「入口で息がつまりそうになり」「それほど足をふんずけられたことがなかつた」ほどの客をあつめた。

その梗概を簡単に紹介してみよう。本篇の主人公はアルノルフという齡不惑に達した男であるが、このアルノルフという名前は裏切られた夫の守護神である聖アルノルフから来ているのであつて、この主人公の名前がまず作品の内容を暗示している。さてこのアルノルフは齡42才になつてアニェスという若い娘と結婚しようとしているのである。町人であつてアルノルフという本名があるにもかかわらず、妙な虚栄心から貴族流にムツシュ・ド・ラ・スシュと呼ばれたがつているこの男は、一方では妻に不貞をはたらかれた夫の手きびしい攻撃者、辛辣な嘲弄者として友人の間でも有名な存在であつた。妻に裏切られ、角を生やされた夫とみれば嘲弄せずにはおれないこの男が、どういう風の吹きまわしによるのか、今度は自分が結婚という危険をおかそうと思つた。しかもその相手がアニェスという16才の娘なのである。他人のことに対して口の悪い批判者であつただけに、自分のことにはその準備に周到な用意をかさね、自分の名譽が傷つけられる心配がないという確信をつかんでからようやく結婚にのり出したのである。このアルノルフは妻たる者は「神にいのり、夫を愛し、縫つたりつむいだりすることが出来れば十分だ。」と信じているので、当のアニェスが4才の時、ある百姓女から貰うけて、自分の思つたように教育するために「浮世をはなれた僧院へおくり、そこで自分の意見どおり馬鹿になるように育てて貰つた」のである。そして年頃になつたので町へ連れて帰つたのだが、自分の家においては人の出入が多く誘惑される心配があるというので人知れず或る家へかくして置き、その監視の役目にアランとジョルジェットというこれもアニェスに劣らないほどの馬鹿な召使をおいてある。このように育てられ、このような召使にかしづかれて世間とは没交渉に暮しているために、アニェスの無知は大変なもので、とくに男との関係については全然知識をもつていない。それでアニェスは「子供は耳から生れるのか」ときいたり、アルノルフが10日ほど留守にしている間にシャツ6枚に頭巾

6つも縫いあげるほどに針仕事に精を出して、大体自分の境遇に満足している。それを見てアルノルフは我事なれりとばかり悦にいつている。

ところがこのアニェスに、アルノルフが所用で10日ほど田舎へ行っている間に一つの事件が起るのである。アルノルフの旧友の息子のオラスが町へ来て偶然の機会にアニェスに会い、アニェスのうぶな心をすつかりとらえてしまうのである。それとは知らないアルノルフは旅から帰ってくるのであるが、旧友の息子のオラスに会い、その成長を祝しながら、この町で亭主達を相手に戦争をはじめて若さを享樂しなさいといつて金を与えるのであるが、何も知らないオラスは自分の情事をすつかりアルノルフに話してしまう。アルノルフはアニェスの前ではムツシュ・ド・ラ・スシュで通っていたので、オラスはアニェスの保護者であるムツシュ・ド・ラ・スシュがアルノルフだとは一向に気がつかない。それで当のアルノルフを前にして「その男は馬鹿だそうですね。御存知ありませんか。」などという。このオラスの思いちがいが基礎となつてこの物語は発展して行くのである。即ち、オラスは父の旧友であり、この町における唯一の相談相手としてアルノルフに自分の情事を逐一報告するし、アルノルフはアルノルフでムツシュ・ド・ラ・スシュのしつぽを出さずに彼の報告を一々きき、それにもとずいて召使をいましめたり、アニェスを訓戒したり、オラスに対して戦備をととのえて行くのである。

オラスの話を書いたアルノルフは、ぐずぐずしていればアニェスを奪われてしまうのではないかと心配し、今のところはまだそれほど事態が進展しているのでもなさそうなので邪魔の入らないうちに結婚してしまおうと決心する。そして結婚する前に、未来の妻に対し未来の夫が結婚について訓戒しておくのは良いことであると思いアニェス呼びつけて懇々といいきかすのである。

「……………結婚というものは冗談じゃない。妻ともなれば、やかましい掟を守らねばならぬ。わたしもお前を女房にするからには、勝手な真似をさせたり、遊び呆けさせておくつもりはない。服従するだけがお前たち女のつとめだ。有鬚の男子こそ全能なのだ。世の中は二つの部分から出来ているが、この二つの部分は同権ではない。一は天より高く一は地よりも低い。一は支配し、一は何事にもあれこれに従う。訓練をうけた兵卒が義務として指導教官に従い、召使が主人に、子供が父親に、新発意が長老に従順を示したからとて、妻たるものが夫たり、長たり、君主たり、主領たる人に捧ぐべき柔和、服従、恭順、尊崇の念に比べたら足許にも及ばんのだ。夫が怖い眼で睨んだら、妻たる者はすぐ眼を伏せるのがつとめなの

だよ。優しい目つきで許してやると言うまでは、まともに夫を見ては相成らん……」

これは後に説教を戯画化したといつて非難されるところであるが①、アルノルフはさらにつづけて、「身持の悪い女は地獄のにえたつた大釜に投げこまれる」などと脅文句をならべたあげく、ポケットから一冊の書物を取り出してアニェスに読ませる。それは「結婚家訓」②と題されたもので、その内容は、

「第1条、結婚して他人の床に入る女は、今の世の様がどうであろうとも、男が自分をめとつたのは彼だけのために自分をめとつたのだということを知るべきである。」

「第2条、妻たる者は夫がのぞむ程度におめかしをすべきである。美しくあろうと思うのは夫のためのみであるべきであつて、他人がどう思うかを意に介すべきではない。」

等々と10余カ条から成るものであつて、結婚についてアルノルフがアニェスにした説教と同様に、妻を夫に服従させ、家庭にしばらくつけておきたいという希望から出た考え方をあらわしているものである。

アルノルフはこれほど用心するのであるが、新しく恋に目ざめた心は、これまで全く無知であつたアニェスの心に本能的な知恵を与えて、アルノルフの警戒の裏を一々かいてゆくのである。オラスが訪ねてきたら石を投げつけるようにアルノルフに命ぜられると、本当に石を投げはするが、新に目覚めた恋心を書きしるした手紙をその石に結びつけたり、アルノルフが召使に警戒を厳重にするよういいつけると、その目をぬすんでそつとオラスを部屋へつれこんだり、梯子をかけて夜、部屋へしのびこもうとするオラスが、そのことを事前にアルノルフに洩らしたので召使たちに襲撃されて死んだふりをするとところがあるが、アルノルフがオラスを殺したのだと思つてさわいでいるすきに、オラスを介抱して一緒に逃げてくれとたのんだり、恋は無知なアニェスに自衛のためにいろいろの知恵をおしえるのである。

結局おいつめられて万策窮したアルノルフが、いふべき言葉をなくして「今迄育ててもらつた恩を何と思うか」と叱りつけると、「ほんとにずい分立派な育て方をして下さいましたのね、万事につけて結構な教育をさずけていただきましたわ！あたしがいい気持になつていとお思いになりますの？あたしが頭の中で自分の愚しさに気がついていないとお考えですの？自分自身で恥しいと思つていますわ。それにあたしぐらいの年頃にもなればできることならもう馬鹿娘で通したくないんですの。」と答えるし、また「あの人のおかげであたしも知ることが出来るということがわかりましたわ。それで御恩のことならあなたによりもあの人にずつと多くうけていますわ。」という。そこでアニェスを思いきれない四十男の愁嘆場がは

じまるのであるが、モリエールはここで喜劇の限界をのりこえたといわれるように、ここまで見ると笑いが一瞬凝固して観客は息をのむ思いがするといわれている。それはともかく、アルノルフの哀訴もアニェスを動かすにいたらず、ここから大団円となつてゆくのである。

結末はイタリヤ即興劇式の唐突さでくる。アニェスの父がアメリカから帰つてきて、昔百姓女に託しておいた娘を探し出してオラスと結婚させるために、オラスの父と同伴で町へ出てくる。これがアルノルフのあがきに最後のとどめをさし、オラスとアニェスが晴れて結ばれるところで幕となるのである。

上述のようにこの劇は大変な成功をおさめて、一座の勘定方ラ・グランジュの記録によれば、初演の1662年12月26日より1663年3月28日までの3箇月間に34回上演され24,929リーヴルの収入をあげたといわれる。その他にこの劇はルーヴル宮で2回、スワッソン伯爵邸、リシェリュ公爵邸、コルペール邸でも上演されたといわれる。1663年3月12日にモリエールは「陛下たちにおなかをかかえさせた」功により4,000リーヴルを王より下賜され、更に復活祭後には「すぐれた劇作家」の資格で王より1,000リーヴルの年金を下賜されたのである。このように国王ルイ14世の庇護をうけ、パリの人たちを涙が出るほど笑わせたという大成功をとつたので、モリエールの成功を快く思わない人々、たとえば「何事にも第一人者となりたがつて自分の意見が尊敬をもつてきかれることを望み、自分が称讃されないで他人が称讃されるようなことでもあると傷つけられたかのように思いこみ、たちまち反対側に立つて復讐するのだが、もしも作者が前もつて作品を見てもらつておけば作品を攻撃するかわりに讃美者となつたかもしれない人々」③や「容色がおとろえはじめて男をひきつけることが出来なくなつたので、それまでの若さと美にかわるものとして貞淑そうな様子を身につけ、他人なら少しも見えないところにけがらわしさを発見して眉をひそめるような人々」④や「体裁さえつくろつていれば、結構有徳な人物なのだと思ひこみ、罪はスキヤンダルの中にあるだけだと思ひ、他人ならば情夫と呼ぶところを男友達と呼んで好きなことをしている女達」⑤や、「腰や肩や頭でバネ仕掛のように調子をとつて歩き、ものうげな様子をしたり、また口を小さく見せるためにほつぺたをふくらませたり、目を大きく見せるためにくるまわしたりするような大層様子ぶつたプレツシェーズ達」⑥や、「他人が褒めるものならば何でもけなしておけばよいと思つている少し頭の足りない侯爵達」⑦や「哲学的な様子をしてもつたいぶつた声で話をし、シラブルに一つ一つ力をいれて正確に発音して見せた

りする詩人達」⑧が次第に一団となつてモリエールを攻撃しはじめたのである。それは偽才女や愚かな侯爵、偽貞女、信者、作家、モリエールの競争相手であるオテル・ド・ブルゴーニュの「グラン・コメディヤン」と呼ばれる俳優達を交えた、それぞれ利害関係はことなるが共同の敵モリエールに対して同じ陣営に立つた人々の一団であつた。弟のトマ・コルネイユが「女房学校」の中で嘲弄されたと思つたピエール・コルネイユは、自作「ソフォニスブ」の失敗でいらだつている時なのでモリエールの敵にまわつたし、モリエールに嘲弄されたと信じたフィヤード公爵は、モリエールに出会つた時、やさしく抱擁するようなふりをしてモリエールの顔を自分の上衣のボタンにこすりつけて血だらけにしたという事件もあつた。

こうした人々は思い思いの面から「女房学校」に対して攻撃を加えたが、当時のサロンにおいて一番いいたてられた批判の一つは、モリエールは「女房学校」において女を「動物」と呼んでいるから彼はこの作品で女性を攻撃したのだとする批判であつた。これはドノー・ド・ヴィゼーにとりあげられて、「女性とその才知を一緒に攻撃するとは！たしかに彼（モリエール）は私達がアニエスのように愚かで無知であつてほしいのです。」と「ゼランド」の中で述べられているし、またモリエール自身も「ヴェルサイユ即興劇」の中でそれをとりあげて、「あの無作法者は女が才知をもつてはいけないのでしょうか。私達の高尚な表現にはいちいちけちをつけますし、そして卑しい話し方をしろと私達にいつているのです。」といわせている。それと同時に、この作品には大変無作法なところがあるという批判も多くきかれた。「オラスが私のあれをつかんだ。」とアニエスが言いさす場面など攻撃的となり、「女房学校の第二幕第五場ほどけがらわしいものはない。」とコンティ公は「神父達の意見」で述べているし、ブルソオはじめ多くの人がある点を淫猥なりとして攻撃している。また女を男の「スープ」にたとえた個所や「耳から子供が生れる」という個所もプレッシュェーズや偽貞女たちの胸をわるくさせている。それから何の定見もなく有名なものだと見ればけなしとなる愚かしい侯爵たちの意見もあるが、それは意見にならない意見であつて、モリエールはそれを「女房学校批判」の中で、「あの作品がつまらないのだということを証明するには他のものはいらぬ。平土間の客のひつきりなしの笑いの爆発を見さえすればよい。」とか「あの作品はいやらしい作品です、何となればいやらしいからです。」とか「私に何がわかります、私は耳をかそうとさえしなかつたんですからね。でもあれほどつまらない作品はないということはよくわかりますよ。そばにいたドリラも私と同じ意見でしたからね

。今一つは「女房学校」は作品としては不完全で劇の規則に反するものだとし、モリエールの中に喜劇俳優だけしか見ないようなふりをする人々の批判で、モリエールはその批判を「女房学校批判」の中で「この種の劇は正しく言つて喜劇ではないのです。」とか「アリストテレスかホラティウスを学んだ人ならこの劇が劇の規則にもとるものだということはすぐわかりますよ。」とか「劇という正しい名前をつけられないような作品を我慢することが出来ますか。つまりそのわけは、劇詩という名称は動くという意味のギリシヤ語より来ているのであつて、劇の本質は本来動作の中にあるのです。ところがこの劇では動作は起らない。そしてすべてはオラスかアニェスかのする話しから成立つていっているのです。」と詩人リジダスにいわせて要約しているし、また「女房学校批判」のリジダスで自分のことが演じられたのだと思つて攻撃にたつたブルソオは、「画家の肖像あるいは女房学校再批判」の中で、「この学校はただに劇のすべての規則に反するのみでなく喜劇の規則にも違反している。すなわち主人公は終始狂気に近いような恋心を示しつつけるし、しまいにはアニェスに向つて自殺してほしいのかと言ふに到るからです。これは悲劇にふさわしいことなので人は歎きや涙やうめき声を悲劇のためにとつておくのです。」といつている。そのほか作品については「アルノルフがオラスにおしげもなく財布を与えるところがあるが、彼はこの作品では滑稽な人物なのであるから、このように紳士のようにふるまわせるのはおかしいではないか。」<sup>⑨</sup>とか「ある場所では才知あり真面目な人物であるムツシュ・ド・ラ・スシュが、五幕でアニェスに向つて恋のはげしさを訴える時、あまり滑稽で大げさなのは変ではないか。」<sup>⑩</sup>とか「劇中の人物が始終町角で会い、そこで劇が進行するというのは不自然ではないか。」<sup>⑪</sup>とか「アルノルフがアニェスに石を投げるよう命ずるところがあるが、そこで用いられているグレという語は女がやつと持ちあげられるような石をいうのであるから、これは一体どういうものかエロミール（モリエールのアナグラム）にきいてみたい。」<sup>⑫</sup>とかいつた風の「坊主にくけりや袈裟までも」の類の批判をも含めて、いろいろな攻撃がモリエールに向けられた。また「モリエールは下手な俳優である。」という攻撃は主として彼の競争相手のオテル・ド・ブルゴーニュの俳優たちによつてなされたものであつた。

このような攻撃に対してモリエールは1663年6月に「女房学校批判」を1663年10月には「ヴェルサイユ即興劇」を發表してそれぞれの批判に答えているのだが、その答えは一、二の強弁に類するものを除いては大体モリエールらしい公正なものであつた。そして上述のような批判はそこで大体適正に反駁されているといつて良からう。この論戦においてはモリエー

ルの側でも反対者の側でも主として喜劇作品の形で論議の応酬が行われたので、この一連の論争は普通「喜劇戦争」と呼ばれている。この喜劇戦争は当時無名の作家であつたドノー・ド・ヴィゼーが「女房学校の成功は俳優の好演によるものである。」という意見を1663年2月、「ヌーヴェル・ヌーヴェル」に発表したのに端を発しブルソオなどをモリエールの敵側に立たせてモリエールが「ヴェルサイユ即興劇」で「もう彼らの批判に答えて時間を浪費しようとは思わない。」と宣言した後にも続いて1664年3月のフィリップ・ド・ラ・クロワの「喜劇戦争あるいは女房学校擁護」にいたつて終つているのである。

上述のようにモリエールは「女房学校批判」や「ヴェルサイユ即興劇」において各方面からの批判に対し一々適正に答えているのであるが、それらの敵側からする批判はそこで弁駁しつくされているような観がある。そしてそれらの批判はモリエールの本質と根強く対立するようなものではなく、又、モリエールの牙城をゆるがすものではなく、したがつて軽くあしらわれてしまつたように見える。それというのもボワロがモリエールにおくつた詩の中で、「もし君がもう少し人気があればそれほど彼らに憎まれないであらうに。」と述べているようにモリエールの名声に対する嫉妬から生じたものが多かつたからである。

ところがこうした片々たる批判のかげに、もつと底の深い根強い反対がかくされていたのである。それはカトリックの宗門の側からする批判であつて、モリエールの「女房学校」がアニェスという一女性の教育問題をめぐつて、人間の巧智は自然にかつあたわずという、自然の善性を信じ、自然のあるところに調和と美を見ようとするルネッサンスの自然哲学の流れをくんでその上に組立てられているものであつて見れば、これは当然予想されるべきものであつたかもしれない。この宗門からする批判は表面華かに見える「喜劇戦争」の表舞台にはさほど大きく姿をあらわしてはいなかつたけれども、かなり流布されていたらしく、ドノー・ド・ヴィゼーは1663年8月の「ゼランドあるいは女房学校の真の批判」で「私はアルノルフがアニェスにする説教や結婚についての10カ条が我々の宗教的秘義をそこそこのうものであるとは言わない。世間中では随分それを批判しているから。」とのべてこれを確認しているし、モリエールも「女房学校批判」の中でリジダスに「説教と庭訓は滑稽なもので、我々の宗教的秘義に対してはらわねばならない尊敬をそこのうものではないか。」といわせてその事を認めている。もつとも「女房学校」の中でオラスに「すばらしい魂の素質をいじわるくそこなつたり、その才智の輝きをおし殺そうとして無知と愚昧の中にとじこめておいたりす

るのは、天人ともに許さざる罪悪ではありませんか。」と言わせたり、アニェスに、「ほんとうに随分立派な育てかたをして下さいましたのね。万事につけて結構な教育をさずけていただきましたわ！あたしがいい気になつていとお思いになりますの？あたしが頭の中で自分の愚しさに気がついていないとお考えですか？自分自身で恥しいと思つていますわ。それにあたしくらいの年頃になればできることならもう馬鹿娘で通したくないんですの。」とか「あの人のおかげであたしもまた知ることが出来るという事がわかりましたわ。それで御恩のことならあなたによりもあの人にずっと多くうけていますわ。」と言わせている自然哲学の信奉者であるモリエール、ラブレーの流れをくんで、自然なるものの中に調和と美を見ようとするモリエールにして見れば、自然を悪とみる宗門の考え方よりして当然反駁が来ることを予想すべきであつたかもしれない。さてモリエールはふれるべからざるものにふれ、尊いものを戯画化し、宗教を誹謗するものであるという非難のほか、「女房学校」は風教を害するものであるという非難もあらわれた。こうした批判はロシュモンによつて「意見書」（1665年）の中では「彼のアニェスの悪質なるぶさは、もつとも淫な話以上に処女たちを腐敗させた。」とのべられているし、又、ボツシュエによつて、「演劇に関する箴言と考察」（1694年）の中では、「この教会法の苛酷なる非難者、我がプレツシューズの外見と表現の重大なる改革者が、夫における卑しむべき寛大さの利益を白日のもとにならべたて、やきもちやきに対し恥ずべき復讐をするように妻達をそそのかしている議論を私は否認する。」とのべられている。こうした見解は「女房学校」と直接関係はないけれども、パスカルが「パンセ」においてのべている演劇に関する意見と相通するものを持つていたのである。すなわち、

「大がかりな娯楽はすべてキリスト教徒の生活にとつて危険であるが、世人の作り出したそういう娯楽のうちで、演劇ほどおそるべきものはない。演劇は情念の大そう自然で大そう巧妙な表現であるから、もろもろの情念をうごかし、それらを——殊に恋愛の情念を——我々の心に生ぜしめる。恋愛を大そう潔かな大そう正しいものとして表出する時とりわけそうである。なぜならその恋愛が浄かな心の人々に浄かに見れば見える程、人々はそれに感動をうけるようになる。恋愛のはげしさは我々の自愛心の氣に在る。そうしてこの自愛心はそこに見る実に巧みなる演出による効果と同じ効果をひきおこしたいという慾望をすぐに抱く。またそれと同時に、その抱く考えの基礎をそこに見る感情の潔さの上におく。この感情は浄かな心からこの浄かな心のもつおそれをとりのぞいてくれる。この浄かな心はあのようにも貞節に見える愛をもつて愛することは純潔を傷つけるものではないと思うのである。か



くて劇場を出る時、心はあらゆる美とあらゆる甘やかさにじつによく満されていて、又魂と理性とはみずからの清浄さをじつによく納得させられているから、我々はただもう感動のおこり次第にこの感動をうけいれうる状態になりきつている。——というよりは、劇中に見たあのようにも巧みに表現せられた喜びや犠牲と同じものを受けいれたいために誰か人の心にそういう感動を生ぜしめる機会をひたすら求める状態になりきつている。』<sup>⑬</sup>

とのべられているが、こうした宗門の意見を検討して見ても、それがモリエールの思想といかに対照的な地点に立ち、本質的に反撥しおうものをもつていたかがよくわかるのであり、「女房学校」に対して宗門の側から根強い攻撃が起つた理由も亦決しきまぐれなものではなかつたことが了解されるのである。

この宗門側の攻撃は「喜劇戦争」のはなやかな前面にはさして目立つて押し出されてはいないけれども、モリエールがその「女房学校批判」を信者である母後のアンヌ・ドオトリシュにささげ、その献辞の中で「陛下は真の信仰はまじめな娯楽と両立しないものではないことを証したまい、その高い思想と重要な職務から非常に人間的な態度で我々の芝居を見る喜びにおりたちたまい、よく神にいのるその同じ口で笑うことをさげすまれることはないのです。私はそうした光栄を期待して心ひそかに喜んでおります。そして辛抱よくその瞬間のくる事を待つております。もしも私の希望がいれられますならば、それは望外のしあわせであります。」とのべているが、これをもつて見ても当時の信者の勢力がいかに侮りがたいものであり、又、モリエールが母后を自分の陣営にひき入れることによつて宗門からの非難をいかに回避したがつていたかがよくわかるのである。

上述のようにモリエールの思想は宗門のそれと本質的に対立するものであつたけれども、モリエールにしてみれば「女房学校」において最初から意識して宗門を攻撃したわけではなかつたのである。モリエールにしてみれば、これまでいくつかの悪徳をとりあげて舞台の上でえがき出して見せたように、彼が悪徳の一つと信ずるものを喜劇に関する自己の信条にしたがつて「笑いながらこれを矯正する」ために舞台にのぼせたにすぎないのである。ところがこれを発表すると各方面から意外に多くの攻撃をうけ、これをうけて立つて「女房学校批判」「ヴェルサイユ即興劇」という風に論争をくりかえしているうちに、本当の敵はまだそれほど表面に出ていない宗門の勢力であつて、その勢力があなどることが出来ないほど強力であり、その攻撃が実に頑強であるということが次第にわかつてきたものであろう。そのせいであらうか、宗門よりする批判に対してモリエールのとつた態度は、彼がドノー・ド・ヴ

イゼーやブルソオに向つてとつた態度とくらべて見ると大層消極的な印象を与える。「女房学校批判」ではドラントに「君が説教と呼ぶ道徳的な話については、それをきいた本当の信者は、それが君の言うものをそこなつていとは見ていませんよ。それから（地獄）だとか（にえたつた大釜）だとかいう言葉は、アルノルフの無法さと、彼が話しかけているアニエスの無知によつて十分正当なるものとなつていと思います。」と語らせて、真の信者ならそういう事は言わないであろうという態度を示しているし、母后アンヌ・ドオトリシュに捧げる言葉では、「陛下は真の信仰はまじめな娯楽と両立しないものではないことをよく証したまい、その高い思想と重要な職務から非常に人間的な態度で我々の芝居を見る喜びにおりたちたまい、よく神にいのるその同じ口で笑うことをさげすまれることはないのです。」とのべて母后を真の信者であると考え態度を示し、真の信者である母后は演劇に反対されないのであるとのべて、暗に母后の庇護の下に立つて宗門からの非難の矢を回避したいという態度をほのめかしているし、又、「ヴェルサイユ即興劇」ではモリエール自身の言葉として、「しかしそのすべてのものを彼らに与えるのだから、彼らは爾余の事は私に委ね、彼らがその喜劇の中でそれについて私を攻撃したと言われるような事柄にはふれないようにしてもらいたいのだ。」とそういう問題にふれられたくない態度を示し、余計に宗門をを刺戟するような言辭を弄する攻撃者に、真面目に怒りをさえ見せているのである。それから、「君のいうものをそこなつていとは見ていない。」とか「それについて私を攻撃したと言われるような事柄」という風に宗教の問題にふれる場合には非常に慎重な態度をとつていのである。

こうした態度は次に来る大作「タルテユッフ」において明かに意識して宗門攻撃に一步をふみ出すその前の段階の、態度保留あるいはためらいの段階にあると見るべきものであつて、「女房学校」そのものは別に宗門を意識して攻撃したものではなかつたのであるが、この作品を契機としてこうした段階に立ちいたつたのであるから、そうした意味で「女房学校」とそれにつづく論争を「タルテユッフ」を用意したところのその前奏曲と呼んでいいのではないだろうか。

- 〔注〕 ① アルノルフの結婚観は当時の一般的風潮であつて、また教会の承認するところであつた。そのことはモリエールが説教を戯画化したといつて非難されたことによつてもわかる。
- ② 「ランソンの研究によれば、聖体秘蹟教会に加入してこちこちの信者になつた文学者、デマレ・ド・サン＝ソルランの訳になるナジアンズスの聖グレゴリウスの『オランピアに与うる訓え』と題する書のパロディにほかならない」（小場瀬卓三・タルテユッフ研究）
- ③④ この人物の粗描はモリエールの「女房学校批判」による。

- ⑤⑥⑧ この人物の粗描はモリエールの「ヴェルサイユ即興劇」による。
- ⑦ この人物の粗描はモリエールの「女房学校批判」による。
- ⑨⑩ モリエールの「女房学校批判」による。
- ⑪ ドノー・ド・ヴィゼーの評言。
- ⑫ ドノー・ド・ヴィゼーの「ゼランド」による。
- ⑬ 「パンセ」は「タルテユッフ」の出版の翌年1670年に始めて刊行されたもので、「女房学校」とは直接関係がない。かつこの断章は写本しかなく素性が明らかでない。パスカルのものでないにせよ、ポオル・ロワイヤルのジャンセニストの意見と考えてもよかろう。演劇への攻撃はジャンセニストや「聖体秘蹟協会」の共通の態度であつた。